

—アモス6章・1a、4-7、1ティモテ6章・11-16、ルカ16章・19-31—

〔そのとき、イエスはファリサイ派の人々に言われた。〕「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。(中略)わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きていた間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。』(後略)」 —ルカ16章—

貧しい人を顧みられる神

”衣食足りて礼節を知る” 貧しかった日本が豊かさを目指す途上で、良く耳にし、口にしてきたこの言葉が、今や死語に！そして”衣食足りて心を失った”大人たちが育てられた子どもたちが今、人間になれないで叫びをあげている時代と言われる現在、自己中、キル子、不登校、引きこもり、異常性虐待、依存症、ホームレス、自殺、無差別殺人等、他人事と思っていたこれらの出来事が家庭の現実となりつつあります。

貧しさを厭い、豊かさ一辺倒で突き進んできた世界が、ここにきて疲れを見せ始め、私たちの家である地球は持続が不可能になる気配を漂わせているのです。

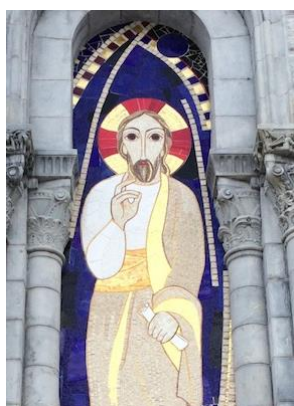
二千年も前から、地球にいられたイエスは訴え続けておられます。

「神と富とに仕えるこ

とは出来ない」「財産のある者が神の国に入るのはなんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりもラクダが針の穴を通る方がまだ易しい」と。

神の国に入るために、私たちは富ではなく、神に仕える者にならなければなりません。富に仕えて着ぶくれた服を全部脱ぎ捨てて神の手で針の穴を通していただけのようには！富は蓄えるものではなく、分かち合うものだからです。貧しい人が一人でも存在する世界で、富を持つことは、神の目には不正であり罪なのです。

神の神殿がある、シオンに安住し、サマリアの山で安逸をむさぼり、象牙の寝台に横たわり、長椅子に寝そべり、子羊と子牛を取って宴を開いて歌に興じる者たちへの破壊をアモスは預言し、厳しく批判します。こうし



2022年9月25日
主任司祭 昌川信雄

て国を滅ぼしたイスラエルの宗教指導者たちは、苦役の時を経て祖国への帰還を果たしながらも貧しい人を顧みず、かつての繁栄にあぐらをかいてここにきてイエスの教えを嘲笑ったのです。

律法に忠実に生きると言って天国をわがものに、貧しい人たちを顧みないファリサイ派に、イエスは、「あなたたちが顧みない貧しい人たちがこそ天国は彼らのものであり、モーセと預言者に耳を傾けないあなたたちのものではない」ことを『金持ちとラザロ』のたとえを持って、痛烈に宣告するのである。